

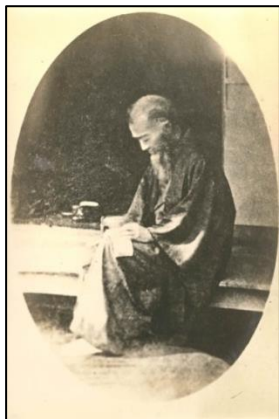
企画展示報告 1 幕末・明治写真展 ―カメラがとらえた歴史の残像―

開催期間：平成 28 年 7 月 1 日～10 日 主催：鯖江市・鯖江市教育委員会

はじめに ―間部詮勝研究の嚆矢として―

鯖江市では平成 23 年度から 4 年間をかけて鯖江藩主間部詮勝を顕彰する事業を展開してきた。加えて、昨年度は詮勝が老中として深く関わった「安政の大獄」をテーマにシンポジウムを開催し、市内外に彼の事績を広めるとともに、これまであまり知られてこなかった詮勝の側面を見出し、また再評価して幕末の政治史・人物史研究に新たなテーマを投げかけてきた。

今年度は、間部詮勝が生きた幕末、そして明治の日常にスポットを当て、企画展「幕末・明治写真展―カメラがとらえた歴史の残像―」を開催し、「旅に出る」「日々を過ごす」「時代をつくる」という 3 つの展示テーマを設けて、人々の営みを紹介した。



間部詮勝肖像（当館画像）

1. 明治維新と日々の生活

19 世紀、産業革命を経た欧米諸国は圧倒的な技術力と軍事力を背景にアジアへ迫り、次第にその脅威は鎖国中の日本にも大きな影を落とし始めた。嘉永 6 年（1853）のペリー来航をきっかけに、長きに亘って続いた鎖国の時代は終わりを告げ、わずか 15 年のうちに江戸幕府は崩壊。明治新政府による新しい国づくりが始まった。

明治の夜明けを迎えた日本には、多くの「お雇い外国人」が流入し、彼らによってもたら

された新技術によって、瞬く間に劇的な文明開化を遂げた。一方で、開国と同時に日本にやって来た外国人は、自国とは風土も生活様式も全く異なる人々に驚き、その様子を手記や写真に次々と収めていった。彼ら外国人の目に映ったのは、貧しさの中でもいきいきと賑やかに日々を過ごすありふれた人々の営みであり、それはやがて失われることを予感させる儚く美しい姿でもあった。そして、その日本の姿は、新技術を逸早く導入した日本人の手によってもとらえられ、今に受け継がれてきたのである。

本展では約 60 点の写真のパネルのほか、万石通し・唐箕などの農具や福井城の瓦などを展示し、在りし日の日本の情景と去り行く時代の 1 コマを再現した。



展示室

2. 鯖江の文明開化

近代化の潮流はほどなく鯖江にも及んだ。明治 28 年（1895）には、恵美写真館（鯖江

市本町）が創業し、当地でも人々の暮らしが撮影され始めた。この写真館自体も一見すると洋風を取り入れた文明開化の波を感じさせる擬洋風建築の建物だが、車寄せ部の扇垂木の軒回り、アーチ型虹梁こうりょうの絵様などに伝統的な和風の意匠が施されているのが見て取れる。この建物は平成 10 年（1998）に鯖江初の国登録有形文化財となって往時の姿を今に残している。

明治 42 年に福井県ガイドブック編集所から発行された『福井県写真帳』（当館所蔵）には、福井県下の実業家や商家などの約 550 点の写真が収められ、現在の鯖江市域からは恵美写真館のほか、三笑堂（製茶商）・布袋屋（和洋菓子商）・酒井商店（生糸商）など北陸道に面した商家など多くの写真が掲載されている。

さて、昭和 15 年（1940）に発行された「大日本職業別明細図（鯖江町及附近町村）」（当

館寄託）を見ると、菓子商の布袋屋とならんで大黒屋の位置を確認することができる。江戸時代からの創業である両店舗では、間部詮勝さいかとうゆかりの菓子「菜花糖」を販売しており、現在、布袋屋は廃業されたものの、大黒屋が鯖江の銘菓を守り続けている。また、同じく江戸時代の創業である三笑堂（三笑園 石川茶舗さいのぼろ）では、間部詮勝が愛飲し「御代治」と命名した茶を製造しており、各店舗や町並みの様子から、かつての本山誠照寺の門前町、鯖江藩の城下町の賑わいが伝わってくる。一方で、明治 24 年に創業した酒井商店の写真では、家族や従業員とおぼしい人々の姿が撮影されており、機業が盛んとなった近代鯖江の風景をよく表している。

幕末から明治にかけての激動の時代、鯖江では、幕末期の日本の命運を握った間部詮勝や、明治法律学校（現在の明治大学）の創立



恵美写真館



布袋屋



三笑堂



酒井商店

者の 1 人となった矢代操が誕生した。彼らの礎となった鯖江もまた時代の移り変わりとともに、かつての姿を消し、近代化を遂げていったのである。

3. 記念講演会（平成 28 年 7 月 2 日）

本展に関連して、岩下哲典氏（東洋大学文学部史学科・大学院文学研究科教授）をお招きして記念講演会を開催した。

演題：幕末写真大名のはなし

—西洋文明の受容と写真の見方—

おわりに —今後のテーマ—

先述のとおり、本展は鯖江藩主間部詮勝の顕彰事業を契機に開催された企画展である。鯖江藩に連なる人物としては、矢代操や藩主間部詮房が有名ではあるが、多くの歴史は語られることなく、失われたものも多い。しかし、幸いにして当市には藩政時代から伝来する資料が多く残されており、これらを用いることで、家臣団の編成・給与体系の変遷・家格と職制の問題など、様々な研究テーマを掲げることができる。今後も、既存の資料の幅広い活用と、新資料の発掘によって、企画展

等の機会を設けて「在りし日の鯖江」の姿を披露していく予定である。

本展開催にあたり、高知県立坂本龍馬記念館・徳川林政史研究所・日本カメラ博物館・福井市立郷土歴史博物館・放送大学附属図書館・明治大学史資料センター(50 音順・敬称略)の御協力を得た。記して感謝申し上げる。



展示解説会



鑑賞風景

企画展示報告 2 祭りと祈りの原風景

開催期間：平成 28 年 10 月 1 日～30 日 主催：鯖江市・鯖江市教育委員会

はじめに —鯖江の宗教史—

古くより日本には自然への畏敬から、万物に精霊が宿るとする信仰が息づいていた。山の上や海の彼方には死者の魂が向かうとされる「他界」があると信じられ、人々はそこに住まう祖霊へ五穀豊穡と安寧な暮らしを願って祈りを捧げてきた。

越前鯖江も例外ではなく、素朴な自然信仰や山岳信仰は仏教の影響を色濃く受けて、白山信仰として各地に広まり、さらに天台宗と

の関わりも深くしながら、全国へ信者を拡大していった。しかし、浄土真宗が北陸へもたらされると、鯖江では宗祖親鸞の法脈を継ぐ誠照寺と證誠寺の 2 本山と、血統を継ぐ本願寺派との対立が起こる。戦国時代の混乱に飲み込まれた寺社は為政者の隆盛と衰退に呼応し、生き残りの道を模索する日々が続いたのである。

その後、徳川家康によって天下が統一され

ると、およそ 250 年の泰平の時代を迎えた日本は、徹底的なキリスト教の禁令と寺院による領民の統制を行うことで、藩を守り、国を守ってきた。そして、人々はささやかな幸せを祈り、病や悲しみからの救いを得ようと祭りを続けてきた。

「祈り」や「祭り」の有り方は時と共に変化していったが、今でも地域の祭りは住民から親しまれ、愛され、受け継がれている。「信仰と祭祀」の歴史を辿ることは、鯖江の歴史を辿ることにほかならない。本展では、「信仰の山 白山」「浄土への憧憬」「真宗王国」「政治と宗教」「祭りと祈り」の 5 つの展示テーマを設けて、信仰史の側面からとらえた鯖江の歴史を紹介した。

1. 展示紹介

(1) 信仰の山 白山

越前の各所から遠望される白山は、古来より祖霊が住まう霊山として畏れ崇められてきた。山岳への信仰は仏教と習合し、養老元年（717）、修行僧の泰澄が白山を開山すると、



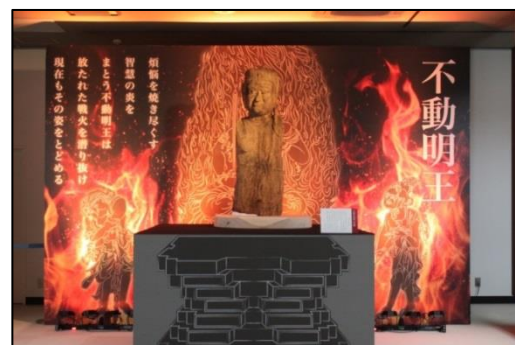
鯖江市指定文化財 上：木造十一面観音坐像
左：木造阿弥陀如来坐像
右：木造聖観音菩薩坐像
(鎌倉時代後期 南井町 片上神社蔵)

山岳信仰は修験道と融合して、白山信仰が体系化された。以後、白山登拝が盛んとなり、越前・加賀・美濃にそれぞれ禅定道と三馬場（霊応山平泉寺・白山寺白山本宮・白山中宮長滝寺）が形成され、各地の寺社に白山信仰が浸透していった。

(2) 浄土への憧憬

奈良時代、仏法によって国家の安泰を祈願する鎮護国家の思想が開花して仏教が隆盛した。その後、平安時代に入ると奈良の仏教勢力に対抗し、最澄が開いた天台宗や空海が開いた真言宗が国家鎮護の要として保護されるようになる。武士が台頭すると戦が恒常化し、治安の乱れた世に生きる人々は「末法の世」の到来を実感し、不安の中で新たな救済者の出現を望むようになった。

鎌倉時代には浄土宗・浄土真宗・時宗・日蓮宗らの新仏教が誕生して、仏の教えは身分の上下を問わず浸透したのである。



鯖江市指定文化財 木造不動明王坐像
(平安時代後期 大正寺町 白山神社蔵)

(3) 真宗王国

13 世紀後半、浄土真宗の宗祖親鸞の弟子たちは各地で教団を形成し、東海地方に基盤を置いた高田系教団(専修寺)は、正徳 3 年(1290)に如道が越前国に進出して、北陸地方で势力的な布教活動を行った。如道が形成した教団は、その後、道性(横越證誠寺)・如覚(鯖江誠照寺)・淨一(中野専照寺)らの法脈に受け

継がれていった（三門徒派）。同じ頃、高田系を中心とした東国の門徒は京都東山に親鸞の墓所（大谷本廟）を造営し、覚如がこれを寺院化して「本願寺」と称したが、寺勢はふるわず次第に衰退の道を辿っていた。

しかし、本願寺第 8 世蓮如による布教が始まると、御文の発給と名号・絵像の下付で門徒の数は爆発的に増加した。文明 3 年(1471)には越前国吉崎へ進出し、北陸布教の一大拠点を築き上げたが、教義の異なる三門徒派を批判したために、両者は激しく対立した。

また、15 世紀中頃に起こった「応仁の乱」の余波は北陸にも及び、加賀国守護の家督争いに浄土真宗内部の本願寺派（一向一揆勢）と高田派の対立が結びついて戦乱へと発展した。本願寺派の援助を得て家督争いに勝利した富樫政親だったが、結局は一向一揆勢に自らも滅ぼされ、加賀には「百姓ノ持タル国」が出現する。

その後、一向一揆勢は頻繁に越前国へ侵攻して、越前を拠点にした戦国大名朝倉氏と激闘を繰り返した。朝倉氏は反一向一揆勢力である天台・真言宗や三門徒派を保護したため、鯖江市域では広範囲で戦闘が繰り返された。

天正元年（1573）、一乗谷は越前に侵攻して来た織田信長の攻撃によって灰燼に帰し、朝倉氏の越前支配は終わりを告げた。朝倉氏の庇護を受けて一向一揆勢に対抗していた諸寺院は、一転して信長の庇護下に入り、信長

が加賀の一向一揆勢を下すまで長く戦いが続いていったのである。

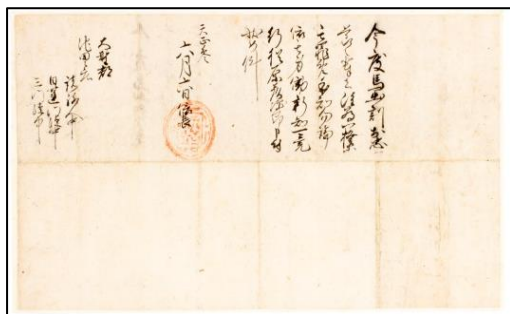
(4) 政治と宗教

織田信長、豊臣秀吉、そして徳川家康によって全国統一が果たされると、ようやく日本は約 260 年間の泰平の時代に入った。幕府はキリスト教を国を滅ぼす「邪教」の教えとして禁止を貫き、檀那寺制度を設けて寺院を通じた領民の統制を行った。

明治時代になると、新政府は新しい国家体制をつくるため政治・経済・軍事改革を推進するとともに、旧来の宗教制度を刷新する神仏分離・神道国教化政策を進めた。この政策は寺院や仏像などを破壊する「廃仏毀釈」へと発展した。仏教側も各地で反対運動を展開し、明治 6 年（1873）、福井県下でも今立・坂井・大野郡で約 3 万人が参加した越前御法一揆が勃発した。このうち今立郡下の暴動を「ぼろんか騒動」と呼んでいる。



展示室（真宗王国）



織田信長朱印状（誠照寺所蔵）



展示室（政治と宗教）

2. 記念講演会（平成 28 年 10 月 14 日）

本展に関連して、加藤基樹氏（富山県〔立山博物館〕主任・学芸員）をお招きして記念講演会を開催した。

演題 信仰の山

白山と立山をつなぐ道とところ

※本講演会の詳細については「記念講演会報告」を参照されたい。

おわりに 一祭りと祈り

江戸幕府や明治新政府は宗教を民衆統制策として用いたが、それ以上に地域で暮らす人々の生活に信仰は深く根付いていた。人々は移ろう季節の節目に寺や神社に集まり、神仏や祖霊の加護に感謝を捧げ、また、道々を

行きかう人を見つめる地蔵菩薩に手を合わせてきた。

そして、大人は子どもたちの健やかな成長を祈り、子どもたちは大人から教えられる説話に耳を傾けながら善悪を学んできた。明治の夜明けを迎え、2 度の大戦を経てもなお、ささやかな「祈り」は今も受け継がれ、信仰は「祭り」となって地域に根付いているのである。

本展開催にあたり、富山県〔立山博物館〕のほか、照臨寺・誠照寺・大正寺町白山神社・当田町八幡神社・南井町片上神社（50 音順・敬称略）の御協力を得た。記して感謝申し上げる。



展示室



展示解説会

講演会報告 「祭りと祈りの原風景」記念講演会

（講師）富山県〔立山博物館〕学芸員 加藤基樹

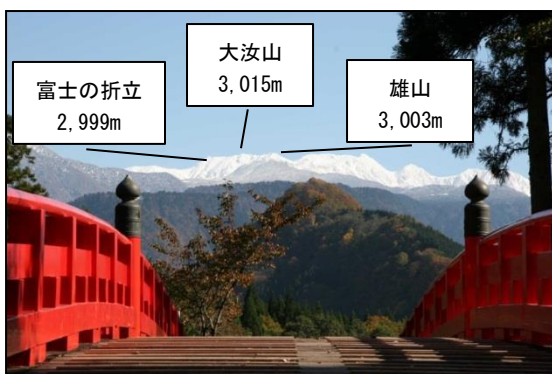
はじめに

こんにちは。ただいま御紹介いただきました、富山県〔立山博物館〕学芸員の加藤と申します。本日は「白山と立山をつなぐ道」と題して、鯖江を含む北陸の精神文化の側面の一端について触れることができたらと思っております。

さて、「お百度参り」や「滝行」、そして「巡礼」。こういったことを「苦行」と言います。この「苦行」とは何かということで、五来重

氏が書いたものを見ていきますと、「庶民信仰における滅罪の論理」だと。要するに、苦しいことをやればやるほど、自分たちの罪は減っていく、「滅罪」です。ですから、お経を読んだりということではなく、苦しいことをやると罪が減っていくのであって、そういう流れから様々な儀礼が生まれたりしていくといわれています。私は今日、立山からまいりましたけれども、山に登るといふ人々の行為というのもの、まさに「苦行」なわけです。

立山には登られたことあるでしょうか。台形の形をしたところが 1 番のピークです。最も高い立山本峰と呼ばれる所で標高 3015m あり、立山連峰の中心です。遠くに白山が見え、反対側にも遠くに富士山が見えます。白山・立山・富士山は日本三霊山・日本三名山と呼ばれますが、実は白山から富士山は見えません。立山からはその 3 山を見ることができるということを御紹介しておきたいと思います。



布橋から立山本峰を仰ぐ

1. 立山と「神」と「仏」の世界

立山を事例に御紹介をしていきますが、これは立山のみならず、日本で霊山と呼ばれるところにはほぼ共通してくる宗教観です。

(1) 自然と人とのかかわり

私たちの先人たちは、当然のことながら山の麓で山と関わりながら生活をしてきました。水が必要だったので、河川の近くに田畑を作りながら人々の暮らしは広がっていくのですが、山の幸を取って、山の恵みを取って生活をする人たちもいました。山菜やキハダという薬草になるものを取ったり、また、山の動物を狩猟・採集したりしていましたが、それができるのは「山の神のおかげだ」と思っていたようです。

一方、海。富山湾で魚を取っている人たち

は、一度海に船を漕ぎ出していくと自分の座標がわからなくなるのですが、そんなときに「当て山」といって、立山を見ながら自分の距離を見ていました。まさに海上においても、山の神が自分たちを見守ってくれていると考えていたようです。

それから、里ではたくさんの人たちが暮らしていましたので、田畑を育てるためには山から流れてくる川からの取水が必要です。こうして水の神様に対する信仰が生まれ、こうした信仰を「水分神信仰」といいます。白山には 4 つの大きな河川が四方に流れておりますが、ここでも川が流れて来る方向の山に対する信仰が形成されてきました。

私たちの先人は、民俗学の世界では、亡くなると靈魂は山へ山へと上がって行くと解釈していました。残された者が靈魂を供養すると高いところへ上がって行き、やがて山の神様になると考えたのです。山は御先祖様たちの靈魂が充満している世界なので、そういった山を霊山と呼び、山の神様を田んぼにお迎えをしてくるという習俗があります。神籬という木を立てて、それを依代にして、そこに山の神様を呼んで来るのです。そうした行事は春の神社でのお祭りとして全国で多く残っています。山の神様を迎えてくることで、自分たちの集落に山の神様が宿って、稲作に大切な田の神となります。そして、秋になって収穫があると、収穫祭として秋祭りをやる。その秋祭りをやったときには、田の神を山へ返す、春祭りや秋祭りとはそのような意味が込められた祭祀だということを柳田國男が提唱しており、「山の神田の神交代説」といわれています。

富山では奈良時代に越中国司大伴家持という方がやって来ました。この方が立山を見て、『万葉集』（立山賦）という書物に次のように

読んでいます。

たちやまに ぶりおけるゆきを
登己奈都尔 見礼どもあかず
加武賀良奈良之

これは万葉仮名というもので、漢字をさらさらと書いたものです。これはどういう意味かというと、大伴家持の時代には、立山という山は異界の地と言ったらいいいでしょうか、靈魂が行く所なので登るところではないと考えられていました。そのため、立山とは麓から仰ぎ拝むということで関わってきたと解釈されています。

この家持の歌では「平野部はすっかりと雪がなくなっているのに、立山はまだまだ真っ白に雪を被っている。これは神様の山だからだろう、見飽きることがない」という讃嘆の気持ちを表していますので、古代は登る山ではないと考えられていたことがわかります。

白山もそうですけども、やがて霊山と呼ばれる立山には「権現」という神仏習合の神格が祀られていきます。これは明治の神仏分離令まで続きますが、立山の場合は「立山大権現」、白山の場合は「白山妙理大権現」が祀られまして、今では完全に形骸化しておりますけども、神仏分離を終えた後でも、立山の雄山神社には「立山大権現」という額字が残されました。企画展で公開されております、片上神社さんの白山三所権現像もそうした考え方のもとで造られた像になります。

(2) 立山地獄信仰

立山といえば、地獄谷と雷鳥ですけども、地獄谷が文献上で最初に出てくるのは立山のほうが先です。

地獄谷はボコボコ湯が沸き出て、ガスが出ています。東日本大震災以降、ガスの濃度が

ものすごく高くなって、遊歩道に入れないようになっておりますが、このような、いわゆる「地獄っぽい」景観が広がっている。血の池地獄は赤褐色の池ですが、立山の地獄谷というのはすごく狭い空間に様々な表現がされました。湯が出てくるところもあれば、ちょっと行けばコバルトブルーの池もあったり、硫黄の結晶の塔のようなものがあったり、赤い池があったりと本当にいろんな表現があるので、これを見た先人たちが「これは〇〇地獄だ」と意味づけをしていった。立山が日本の歴史の中で名声を高めることができたのは地獄谷の存在が大きいのです。

文献上の初見は立山だと言いましたけれど、「本朝法華経験記」や「今昔物語集」という書物が平安時代に編纂され、その中の一節に、「日本国の人、罪をつくりて、多くこの立山の地獄に墮つといへり」と出てきます。それがどれだけの人に読まれたか、ということは置いておいても、そういう考え方が成立していたのは事実で、日本列島の社会に住んでいる人たちは、生前に罪を作ると、死後にこの立山の地獄に墮ちると考えたのです。特に、こういった書物を編纂したのは京の都の貴族や僧侶でしたので、少なくとも彼らの間では立山の地獄というものが認識されていました。

アメリカのフリア美術館に、鎌倉時代成立の「地藏菩薩霊験記絵巻」があります。この中でも釼岳が出てきており、「今昔物語集」の「越中立山の地獄に墮つる女、地藏の助を蒙る語・第 27」の一節に日本を代表する地獄として描かれています。

養和元年（1181）の「後白河院庁下文案」が京都の新熊野神社文書にあります。これに新熊野神社を支えていくための荘園が 28 箇所示されています。そのほとんどが平地なのですが、立山外宮と英彦山が山として荘園に

設定されています。そのほかは土地です。これをどう解釈するかですが、立山は京都から見て北東の鬼門、英彦山は裏鬼門に当たるといことで、この 2 山が重視されたのではないだろうかと考えられています。鬼門とは艮（北東）の方角です。平安時代、貴族たちの側には陰陽道を操る陰陽師という人が仕えており、出かけるときにも方角というものをしきりに気にしていました。まさにこの鬼門の方角に立山の地獄谷があるといことで、貴族たちは恐れ、注目したのでしょう。

(3) 立山山中の磐座

そもそも山というのは死者の世界、靈魂が行くところで登る所ではないと言われていたのですが、平安時代頃になると、山伏や修験者という人たちが山を使って修行をするようになります。山という厳しい環境に身を置けば、大きな罪も滅びていく、と考えたのです。特に、一般の人たちは山にはおいそれと入って行くことはできないわけですが、彼らは村などの共同体に長雨が続きたり、旱魃が続いたり、病気が流行ったりという災いが起こるといのは、自分たちが普段から積み重ねた罪が積りに積もった報いによって起こっているのではないかと考えたのです。そこで、そういう罪を祓うにはどうしたらいいかと考えたときに、山伏に委託をする形で滅罪をお願いした。山伏は山に分け入って、共同体の罪を一身に背負って修行をするわけですから、考えられるだけの苦しい修行が必要になったのです。

来年白山は開山 1300 年です。泰澄さんや 2 行者さん（臥行者・浄定行者）が、修行をして白山を開かれたわけですが、山伏や修験者といわれる人は、あの世と考えられた厳しい環境に身を置いて、できるだけ苦しい修行を

します。そうしたことをやればやるほど背負ってきた罪が祓われていくという発想です。こうした山の宗教者たちが権現信仰、神仏習合思想を推し進めていき、大きな岩や大きな木には神仏が宿ると考えるようになりました。

『劔岳 点の記』という映画は新田次郎の小説が映画化されたものです。富山の劔岳は地獄の針山と考えられていたので、人々は登ってはいけないとされていましたが、明治に入って海外との戦争が繰り広げられる中で、正確な地図が必要になりました。そこで、必要に迫られて陸軍の陸地測量部の柴崎芳太郎という人物を筆頭に、この誰も登ったことがない地獄の針山・劔岳に登るわけです。しかし、山に登ってみれば錫杖頭（錫杖という行者がもつ杖の先端の金属の部分）と鉄剣が残っていた。人類初の登山だと思っていたのに、愕然としたという話です。

なぜそういう、劔岳の頂上のようなところに錫杖が置いてあったのかということについて

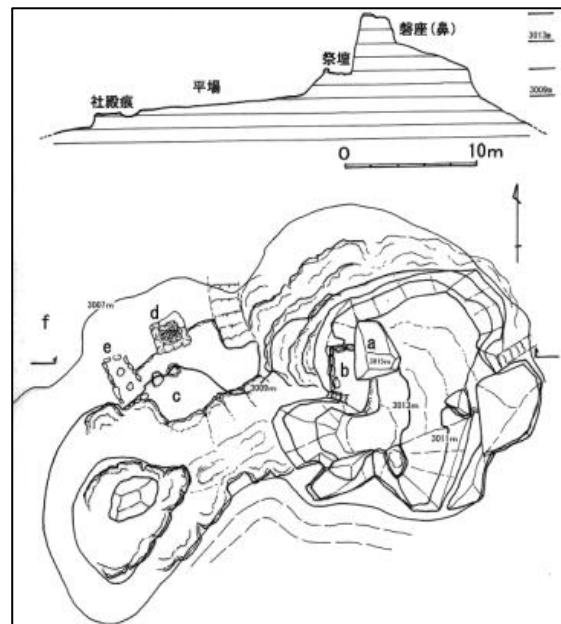


図 1 大汝山頂実測図（山本義孝『立山における山岳信仰遺跡の研究』（平成 21・22 年度富山県「立山博物館」調査研究報告書、平成 23 年）より）

でも考えてみたいと思います。図 1 は立山連峰の最高峰大汝山を測量して、横と上から見た形を表したのですが、山伏たちはこのような地形が大好きです。せり上がった岩などの突き出たものが大好きで、こういった所に「神様が宿りそうだ」と思うのでしょうか。こうした場所には社殿の跡があったり、遺物が出てきたりします。

それから、富士の折立、標高 2999m のピークがあります（図 2）。こういった先端の部分には神様が降りそうだということで、ここでおそらく護摩を焚いたのだろーと思ひます。護摩というのは^{のろし}烽火です。這松なんかを集めてきて烽火を上げると、それが目印になって神様が降りて来る。すると、山伏は降りた神様と一体化して、今度は共同体に向かって護摩を焚くということを行った場所だったのではないかと考えています。

立山開山縁起には洞窟が出てきます。立山を開いた慈興上人、佐伯有頼という少年の話のクライマックスの衝撃的な場面の舞台です。ちょうどいい感じの穴が開いていたからそこが縁起の舞台になったわけではなくて、山上に石の塊があったため舞台になったのです。山伏というのは、板状節理や柱状節理の周りにある洞窟で修行をしますのです、そういった所が、やがて伝説の場所になっていきます。

和歌山県の新宮にはごとき岩という巨石があったり、白山の登山道加賀馬場のほうに

は黒ボコ岩という石があったり、こういった石の付近には、たいてい行場（修行の場所）が設けられた場所でしたので、やがて名所として語られていったのだと考えられます。

（4）山中の集石痕

山を歩いていると、石が集まっている場所というのがたくさんあるのですが、これは何だと思われませんか（図 3）。

実は経塚か護摩焚き石と考えられているもので、こういったもの下にはお経が埋められ、この辺りで祭祀が行われたと考えられています。この向こうには劔岳がそびえ、下は深い谷、遠く離れた所から拝むのです。

白山には別山という山がありますが、立山劔岳の隣にも別山という山があります。ここには、幻の池、硯ヶ池という池が出現しまして、この池の縁の部分にも集石が見られます。この集石の下にあると考えられるものがお経になるのですが、山の宗教者は基本的には永続をあまり考えない。朽ちてもいいという発想で埋めますので、残っていないことが多いのですが、法華經（如法經）を納めたと考えられます。



図 3 集石痕

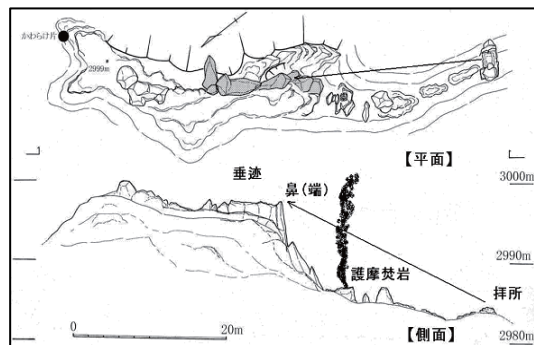


図 2 富士の折立山頂実測図(出典は前掲図 1 と同じ)

（5）磐座よりも建物（堂宇・祠）へ

磐座よりも建物、堂宇や祠のほうに人々の関心が集まっていったという流れをお話して

いきます。立山登山の最後、室堂から見上げると、一番急できつい斜面に一ノ越から五ノ越という場所があります。それぞれの越には小さい祠がありますが、実は祠が設置される前は、越を形成する石そのものの全部が大事だったと考えられていました。それがやがて意味を忘れられて、上の平なところに祠が置かれて、祠だけが大事だと考えられるようになったのです。

(6) カミが垂迹する磐座の山塊

劔岳 (2999m)

カミが垂迹する磐座、つまり御神体の山の塊が劔岳だ、というお話をします。劔岳は「地獄の針山だから登ってはいけない」と語られていたということを先ほど紹介しましたが、当初、劔岳は別山から遥拝する神様の山であったために登山を禁じられていました。けれども、それが変化していき、地獄だから登ってはいけないことになったのです。

劔岳は本当に素晴らしい山です。決死の思いで登った行者が奉納した錫杖は、神様が降りてくるためのアンテナとなり、山全体が御神体になる。それが鎌倉、室町と時代を経ると、地獄の思想がどんどん強められていきます。そうすると、「劔岳の形を見るに、地獄の針山だから人々は登らないのではないか」と

考えられるようになり、ますます人が登らなくなったと解釈できるのです。

別山から見ると劔岳は大きく見えますので、「立山曼荼羅」にも別山から遥拝する人の姿と描かれています。企画展で展示している「立山曼荼羅」の宝泉坊本（富山県〔立山博物館〕寄託／個人蔵）にもこの姿が描かれているので、ぜひ御覧いただきたいと思います（図 4）。

2. 江戸時代の「山岳信仰」の諸相

私たちの先人たちの間では、生前の行いによって死後に閻魔王宮で裁きを受けて、悪行を成した者は地獄に送られると信じられていたようです。そういうことが一般の民衆社会でも知られるようになっていくと、もし裁きの場面に直面したら人々はどう言うのでしょうか。「お前は何か悪いことをしなかったか」と聞かれると、そこで喋ってしまうと地獄に行かなければいけないとわかっているのに、黙秘権を使おうと思うわけですね。しかし、閻魔様の前では黙秘権は通用しません。というのは、横にある丸い大きな板のようなもの、これを浄玻璃鏡といいます。浄玻璃というのは淨い、玻璃というのは水晶ですが、水晶玉を平たくしたような無色透明の鏡だそうです。その鏡の前に引立てられると、亡者の生前の悪事が赤裸々に映るのだと言われています。だから、ここに映った光景を閻魔様が見て、「お前は相当悪いことをしているな」ということがバレてしまうということです。自分の心にしまっているものも、閻魔様には全部お見通しだということです。

ここに映った光景の罪の重さ・程度については天秤で量られます。業の秤と言いますが、この秤に吊るされると、罪が重いとぐっと落ちていきます。すると、「お前は相当悪いことをやらかしているな」となるわけです。こ



図 4 別山から劔岳を遥拝する登山者
立山曼荼羅 宝泉坊本（富山県〔立山博物館〕寄託・個人蔵）

うして、叫喚地獄・大叫喚地獄・焦熱地獄・大焦熱地獄、さらには無間地獄という地獄に送られていくという構造になっているそうです。他にも地獄というのは衆合地獄・八寒地獄・百姓地獄(お百姓さんが必ず落ちる地獄)のようにたくさんあり、一番有名な「嘘をつくと舌を抜かれるよ」という地獄もあります。

このような地獄は地獄絵の中にたくさん描かれていくわけですが、このようにこの世で罪を作ったまま死んでしまうと、閻魔様の裁きにあつて地獄に行かなければいけないので、生前に罪滅ぼしをしておかなければいけない。罪滅ぼしに一番良いとされていたのが「登山」だったのです。山に登るといふ厳しい苦行をする、地獄谷めぐりを行う、ということは生きながらにして地獄に行った(罪滅ぼしをした)ことになるので、実際に死んでしまっても大丈夫だと考えられたのです。それで立山がよく選ばれたのですが、白山でも例外なく登山者がたくさん押し寄せます。白山に登るには御承知のとおり三馬場という 3 つの登山道が開かれていたわけですが、鯖江からはおそらくは越前馬場、平泉寺さんを通して登っていったのではないかと思います。

「諸相」の一端に触れると、「山岳信仰」といってもいろいろなバリエーションがあります。大雑把にいうと白山信仰というのは、登拝登山をすることで、山の神様と結縁をしていきます。白山の神様である菊理媛命を全国の白山神社に勧請し、全国に伝播していくといった信仰的な広がりがあります。その中で、白山の三所権現や白山の神様が絵画化されて、またお像の形になって全国へと流布していくわけです。白山曼荼羅には泰澄と臥行者・浄定行者が描かれておりますが、立山とずいぶん雰囲気違います。

立山は少し勝手が違いまして、白山のよう

に天領ではなく、外様の加賀藩だったので、立山は加賀藩の一番東の壁のような存在でした。加賀藩にとっては山の中を通り抜けてあちこちに行かれると軍事的に危ういので、加賀藩は山の中に直轄の警察部隊(山廻り役)を置いて、勝手に立山の山の中に入れないようにしていきました。加賀藩は白山を天領として取られていたので、何が何でも立山だけは守らなければいけないと考え、加賀藩は立山に対する支配をかなり強くしていたのです。ただ、入ってはいけないとしても信仰登山まで止めることはできなかった。立山は中世にはどこからでも入れたのですが、あちこちから登られると、収集がつかなくなりますし、また、抜けられても困る。かつて佐々成政は越中から信州へ抜けて行ったという伝説がありますけども、そういうことがあつては困るので、常願寺川を遡り、岩峠寺と芦峠寺という 2 つの集落を通してしか登り降りできなくしたのです。

加賀藩の政策ではこの 2 つの集落の宗教的な側面も抑えていきます。ここでは天台宗という看板を上げていながらも、本山は比叡山ではありませんでした。加賀藩の寺社奉行が支配しているので、本山は存在せず、全国的に見てもとても異例な集落、それが立山山麓の登拝拠点となる芦峠寺・岩峠寺でした。ですから、立山の信仰の世界というのは、天台宗のような顔をしながら浄土真宗の要素や浄土宗、また曹洞宗の要素もあり、いろんな要素がごちゃ混ぜになっているというのが特徴です。

また、立山連峰というのは、本当は広範囲に亘るのですが、立山信仰の対象域は、ごく一部に限定されているという特徴もあります。したがって、立山信仰にも白山と同じく登拝・結縁というのがありましたが、実は芦峠

寺と岩嶽寺の 2 つの拠点（ベースキャンプ）にできた宿坊街では客の取り合いの争論が絶えなかった。そのため、加賀藩は権利を分散させるため、次のような裁許を下しました。

岩嶽寺は里に近いので里での活動をしていましたが、その活動を中止させて山の権利を与える。芦嶽寺は山とともに暮らしてきたのですが、山の権利を取って、平野部での活動を与える、という得意技を入れ替えるということを行ったのです。つまり、麓の岩嶽寺さんは登拝・結縁のときの山銭の徴収権や山の管理権を奪われてしまったため、山での活動をできずに収入が得られなくなった。芦嶽寺さんはすごく困るわけです。だから、困った芦嶽寺は「全国に布教していけばいい」と考えるようになり、「立山曼荼羅」というものを作ったのです。それから、もう 1 つは立山には女の人には登れないのですが、女性の救済を積極的に進めていったのが「布橋灌頂会」。これもまた後ほど触れますが、こうして作られていったのが 4 幅の掛け軸をひとまとめにした「立山曼荼羅」です。芦嶽寺の人たちはこの四幅を束にして東京・大阪・名古屋へ出かけて行って、「立山は遠くて来れないかもしれませんが、こんな山ですよ」と紹介できるようになったのです。

こうした「立山曼荼羅」の諸本は現在 50 種類発見されていますが、絵解きという方法が用いられました。絵解きは解説ではなくて、これを説明することによって信心を惹きつけるという宗教的な行為ですけれども、今ではその伝承者がいなくなっていましたので、どのように語られていたのかということが残念ながらわからなくなっていました。しかし、幕末に作られた絵解きの台本が奇跡的に残っています。それによりますと、「この四幅一面の画面は、高祖先達思惟して、女人を

救はんそのために色心不二を開示して、我らが心の善悪をそのまま見る目にあらはせり。心に心を問ふならば、などか此に替はるべし。疑い止めて今暫し、敬礼供養なすならば、この場がそのまま禅定ぞ。時は大宝元年…」と語っていたのです。

つまり、この 4 幅 1 面の大きな絵は昔の人がよくよく考えて、女の人を救うために、「我らが心の善悪をそのまま見」た目に表したものです。絵解き師が語っていることを「本当かな」と疑うのではなくて、今少しの間、この絵を供養することがあれば「この場がそのまま禅定ぞ」と言うわけです。要するに、「禅定」というのは山に登ることですから、「この絵を供養することで疑似的な登山ができますよ」というわけです。

企画展で展示している「立山曼荼羅」宝泉坊本は、50 種類の中でも超ブランド物です。幕末に老中を勤めた松平乗全のりけんが、安政の大獄で大変なときにこういった絵を描いていたのです。このことも驚きなのですが、これを立山の宝泉坊という宿坊に奉納しました。この天地の部分に表装があります。この表具は後の家茂いえもちの衣を拝領して、それをリフォームして作っているものですので、地模様がとてもきれいです。ぜひ、この機会に見ていただきたいと思います。

3. 白山と立山をつなぐ巡礼道

ぜひ、今日ご紹介して、覚えて帰っていただきたいのが「三禅定」という言葉です。みなさんがよく知っている言葉に「三馬場」がありますので、「白山禅定のことではないのか」と思われるかもしれませんが、実は「三禅定」というのは白山と立山と富士山の 3 つの霊山をぐるっといっきに廻る、この大巡礼のことを「三禅定」と呼ぶということが、江戸時代

の百科事典『節用集』に出てきます。

「三禅定」へは、ほとんどの人が愛知県（尾張・三河・美濃）辺りから出立しているという特徴があります。まずは白山に登り、立山に登り、越えられないので、ぐるっと周って富士山へ行き、東海道を行って国へ帰るという非常に長い旅になります。しかも、こういった 3 山というのは夏山のごく一時期しか登れませんので、そういったときに健脚の男性が登るという旅、「三禅定」というのは単なる物見遊山の巡礼ではない。夏の農作業に手がかかる時期に、健脚の若者が 2 ヶ月近く留守にする上に、費用も莫大にかかるということで、物見遊山のわけがないという解釈です。

4. 「立山曼荼羅」とはなにか？

次に、「立山曼荼羅」については、先ほどその一端を紹介いたしましたが、立山の浄土・立山の地獄・立山の登山案内・布橋灌頂会・立山の開山縁起の 5 つの主題が描かれるのが「立山曼荼羅」です。

「開山縁起」は 50 種類のほとんどで描かれています。そのスタートは向かって左下、ゴールは玉殿窟（図 5）で、説話中、衝撃的な最後を迎える場所です。

大宝元年（701）、白山よりも少し早くに立山は開山されたと言われています。都から佐伯有若という方が越中国司として馬に乗ってやって来られた。その息子に有頼という 16 歳の少年がいました。道中、倶利伽羅峠で休憩をしておりますと、遠くから真っ白な鷹が飛んできます。真っ白な鷹は珍しいので、父有若はその鷹を大切に可愛がり、日々まつりごとを行っておりました。そんなある日、息子の有頼少年は、お父さんが大事にしていると百も承知の鷹を借りて鷹狩りに出かけます。夕方になって、そろそろ帰ろうとした時に鷹

を呼んで連れ帰ろうとするのですが、鷹が帰って来ないのです。鷹を失ってしまったは大変、と一生懸命探すのですが見つかりません。この有頼少年、設定上はものすごく素晴らしい少年で、本当に孝行息子で身分の高い少年なので、お父さんに素直に謝りに行くわけです。ところが、お父さんは激怒し、有頼は勘当されてしまう。そして 1 人寂しく鷹を探しに出かけるのです。

鷹を探しておりましたら、鷹が木にとまっているのを見つけ、そっと忍び寄って、もう少しで手が届きそうだとするところで、茂みから獰猛な熊が出てきた。この熊の出現によって驚いた鷹は再び飛び去ってしまう。白鷹を取り逃がしたのは熊のせいだと有頼は憎らしく思って、殺意をむき出しにして、この熊に向かって矢を放ちます。矢は見事に熊の胸に命中し、血をボタボタと流しながらも、ここで絶命せずに山へ山へと入って行ったので、有頼はその血の跡をずっと追って行く。そして、室堂に位置する玉殿窟に入っていく熊と鷹の姿を有頼は見て、刀を抜いて勇んで入って行くと、中には金色の阿弥陀如来様と不動明王が立っておられた。「あれ」と思って有頼少年がよくよく見ると、阿弥陀如来様の胸には深く矢が刺さって血を流しておられるわけです。それで有頼は、はっと気が付くのです。「自分は知らなかったとはいえ、仏様に傷を



図 5 玉殿窟

付けるとは何と罪深いことをしてしまったのだ」と。それで、有頼はここで腹を切って自害しようとするのですが、仏様が「待て待て。死んでしまうのではなくて、私は熊に姿を変えてそなたを山に導いたのだ。立山の山中というものは、仏様が現れる世界になっている。今、世の中の人たちは山中がそのようになっているとは知らないから、道を開きなさい」と御託宣があり、有頼は感動して弓を折り、一生懸命修行して、出家して慈興上人と名を変えて立山の信仰を広めました、という話ができるようになっていきます。芦峯寺の雄山神社の開山堂には、鎌倉時代のものですが、慈興の坐像が安置されています。開山者といえば、白山の場合は泰澄大師ですね。

5. 「立山曼荼羅」の目的

—「こころ」の江戸時代に…

江戸時代、当時の宗教者は「立山曼荼羅」について何を言っているのか。宗教者といっても様々な立場の人がいました。

近世（江戸時代）は中世の「ムラ」から「イエ」の自立が始まって行く時期ですので、人々の間で「心」というものがすごく問題にされてきます。そうした精神の上に乗って活動する宗教者もたくさん出てきます。

ただ、「心」の善悪による因果応報というのは個人に還って来るだけでなく、江戸時代の特徴というのは何といても「イエ」が 1 つのまとまりだった。「イエ」というのは御先祖様もあれば自分たちもあれば、また子孫もある、そういう関係全部をひっくるめて「心」を問題にしていたわけです。だから、先祖の罪による子孫への応報の論理というものもあるのです。

当時はどうやら「心や欲の制御」というものが、問題になったようです。「制御」という

言い方になると儒教的ですが、「心」の周辺には六道があると考えられていた。六道のうち人間道は今、私たちがいる世界です。「聞いたり念仏を唱えたりできるのだから、今のうちに仏教に発心しなさい」と念仏者たちは勧めていくのですが、大抵は「地獄に堕ちる」ということになります。

それで、先ほど紹介しました「立山曼荼羅」には悪の相として地獄絵に表していきます。江戸時代を生きた人々の課題では「善を行いなさい」と言うけれど、「善というのは一体何なのか」ということがよくわからないわけです。「善は悪いことではないこと。では、悪とは何なのか」と説くことになりますが、「悪というのは煩惱のことだ」と言うわけです。それで、「十悪」というのは、①殺生(ひとごろし)、②偷盗(ぬすみ)、③邪淫(ふてきせつ)、④妄語(うそ)、⑤両舌(にまいじた)、⑥悪口(わるぐち)、⑦綺語(かざりことば)、⑧食欲(ごうよく)、⑨瞋恚(にくしみ)、⑩邪見(じひなきもの)です。考えてみますと、「自分だけよければいいや。人はどうなってもいいや」と人の立場に立てないような考えをしている人が堕ちる地獄というところとわかりやすいですね。

6. 布橋灌頂会

さて、「生前に罪滅ぼしをしておかないといけない。地獄に堕ちたくない」と考えた人たちは、山を目指してやって来ます。しかし、江戸時代、立山に登れるのは男性だけで女人禁制でした。女の人が入って行くと杉の木に変えられたり、石に変えられたりする。これは白山もそうです。明治 5 年まで女人禁制が守られておりました。霊山とはそういった山だったのです。

立山町芦峯寺に常願寺川という川が流れており、そこに注ぐ^{うぼだにがわ}燐谷川という川があります。

この川を境に、富山市街側がこの世、川から山側があゝの世となり、いわゆる三途の川と考えられていたのですね。その境界線のところに架かっていたのが布橋です。布橋は加賀藩の殿様がお金も人足も材料も全部工面してくれる御普請橋でしたが、明治になると、その供給源が絶たれますので、橋は朽ちて無くなってしまいました。現在、橋は復元され、ここで布橋灌頂会の再現イベントが行われています。

かつては、この橋の向こう、いわゆるあゝの世側にも建物がありました。けれども、神仏分離のときに「この建物はだめだ」といって潰されてしまったのです。この中には、**婦尊像**という山の神が 69 体安置されていました。女性たちはこの神の怒りに触れると、杉や石に変えられてしまうのです。

布橋灌頂会がどういう儀式かというと、3 筋の白布の上を死に装束を身に着けた女性たちが、目隠しをして渡って行く浄土入りの儀式です。そして、行った先で血脈という免罪符を授かって、こちらに帰って来ると、一度死んで生まれ浄まってくることになる、そういう儀式です。

つまり、布橋灌頂会というのは擬死再生の儀礼、生まれ浄まる、自らの心に向き合うということで目隠しをして、108 枚の敷板の上を歩いて行きます。信じて疑わないということは白布にあらわれているわけですけど、この白布というのは浄土教、浄土宗や浄土真宗のお寺にはしばしば二河白道という信心の比喩があります。

よく煩悩が「悪だ」と言われますが、その煩悩の中でも女性の恋心はコントロールできない心、それは煩悩そのものということで最も良くないとされます。近松門左衛門の『曾根崎心中』では、「恋を菩提の橋となし」とい

う言葉が出てまいります。この作品は心中物ということで発禁本にもなるのですが、「恋を菩提の橋となし」という言葉に象徴されているように、近松は何も「この世で結ばれないのであれば死んでしまえばいいじゃないか」と言っているのではなく、「煩悩即菩提」という、「煩悩という自分たちの身の有様を自覚せよ」ということを言っているのだと思います。プロの宗教者はすでに発心しておりますので、完全に仏道の世界に入っているわけですが、一般の民衆はそういう世界に気が付いていない。したがって、そういう人たちはまずは仏教の心を起こし、自分の心を自覚するのに恋心というものを使っただろうと思っています。

また、布橋灌頂会というのは参加しないと救われないというものではありませんでした。江戸城の本丸の人たちも儀式は知ってはいるけれど行けない、ということで御寄進として関わっておられます。天璋院篤姫・皇女和宮かずのみやといった方々、大奥の女性たちも寄進に関わっていました。

7. 「真宗王国」と呼ばれる北陸で…

鯖江を含めて「真宗王国」と呼ばれる北陸ですが、浄土真宗には自力とか自覚とか教義的プロセスはありませんけれども、立山信仰を始めとする山岳信仰のような近世民衆思想と「唯心の弥陀」という点で一致していったんだろうと思います。

昨年度、鯖江の照臨寺様に現存しておりました蓮如上人の「数の名号」、実如上人の「九字名号」が確認され、鯖江市の指定文化財になりました。特に「数の名号」といわれる「六字名号」の短冊は、きれいな表紙の上に 50 扁の短冊を貼ったものです。名号というものは大きいものがたくさん出回っていますが、「数の

名号」は「数の」というくらいたくさん作られました。この解釈はいろいろとありますが、もともとは時宗の一遍上人が広められた時宗教団が行った念仏賦算が始まります。念仏賦算というのは念仏をたくさんの人に配って回ることですが、そういうことを浄土真宗的に解釈して、こうした短冊を作ってより多くの人たちに配布してきたのです。

その配布されたものが京都の順興寺というお寺に残っていたのですが、現在、そのほとんどが消失しています。今まで蓮如上人がお書きになった真筆として伝来したものもいくつか残っていたのですが、筆跡を見ると蓮如さんよりも後の御門主の証如さんが書かれたものであることがわかりましたので、蓮如さんのものは存在しないと思われていました。そういう経緯もあって、照臨寺様が御所蔵のものが現存唯一の蓮如上人の筆と考えられる

「数の名号」だと認められたのです。

立山信仰と浄土真宗の教えに共通することというのは、阿弥陀如来を信ずるということ、ただし形だけではだめだということ、自らを知って信じて疑わぬということ、自分だけの問題にしないということ、そういった点が共通しています。浄土真宗の教えと言いましても、歴史的にいろいろと変化していきます。浄土真宗では御承知のように神祇不拝と言いまして、神様を拝まないというスタンスですが、白山や立山を信仰している人たちに対して、それを排除する立場ではないということ、蓮如上人も「御文」また「御文書」の中で言っておられました。

以上、「信仰の山 白山と立山をつなぐ道とこころ」と題しまして、お話しさせていただきました。長い時間、最後まで御静聴いただきましてどうもありがとうございました。

教育・普及活動報告

①わくわくアートフェスタ

開催日：平成 28 年 7 月 24 日

当館の夏休み子ども向け文化芸術体験プログラムとして平成 22 年度から開催している。本事業は、子どもたちが芸術文化を体験することで地域の伝統文化と歴史に触れ、郷土を愛する心や創造力豊かな人間性を育むことを目的としている。また、当館が鯖江市の文化芸術活動の拠点となり、市民に親しまれ愛される施設となるよう、地域の資源や特性を生かした芸術文化を総合的に体験できる事業として開催している。

参加者は芸術、伝統芸能・生活文化・工学、伝統工芸、歴史・自然などの様々な分野のプログラムの中から最大 3 コマを体験でき、制作した作品を持ち帰ることもできる。

平成 28 年度のプログラムと講師は以下のとおりである（敬称略）。

【オープニング はぴりゅうダンス】

ダンスインストラクター 奥山光世
笠嶋 覚

【芸術エリア】

- ① マッキー先生のアート鑑賞ワークショップ
福井県文化振興課 牧井正人
- ② I am アニメーター
映像ディレクター 酒井祥正
- ③ アルミのキーホルダーを作ろう
福井 WEST ライオンズ倶楽部 田安繁晴
名取誉品
金谷重憲
大石和弘
川島健二

【伝統芸能・生活文化・工学エリア】

- ④ THE 園芸！苔玉をつくろう
木曾 三枝子

- ⑤ レッツ！狂言
かわだ夢グリーン狂言クラブ 木村愛子
- ⑥ エンジン体験
工学博士 川本 昂

【伝統工芸エリア】

- ⑦ マジカル染めに挑戦
染色家 佐々木理恵
- ⑧ 漆体験
越前漆器塗師 錦古里正二
- ⑨ DIY 女子・DIY 男子集まれ！椅子作りに
トライ
nicomoco(中西木材) 櫻木恵子
多田日出海
澤田延枝
山田ちひろ

【歴史・自然エリア】

- ⑩ 水鉄砲をつくっちゃおう
当館学芸員
- ⑪ 古代アクセサリ勾玉をつくろう
当館学芸員
- ⑫ 化石のレプリカをつくろう
福井市自然史博物館 有馬達也
濱端恵子



②歴史シンポジウム 今北山古墳の謎に迫る

開催日：平成 28 年 10 月 2 日

国史跡指定を目指し平成 20 年度から調査事業をおこなっている今北山・磯部・弁財天古墳群について、その学術的価値をまとめるに当たり、当古墳群を代表する「今北山古墳」に焦点を当ててシンポジウムを開催した。

四世紀を中心とした古墳時代における越の様相を整理し、今北山古墳の築造背景を探るとともに、将来的な活用方法等についても、

他遺跡での活用事例を参考に、市民目線で活用の可能性を考えた。

当日は、地元有志による「古墳クッキー」の提供もあり、一般から研究者まで幅広い参加者を得ることができた。各演題と講師は以下のとおりである（敬称略）。

【基調講演】

- ・今北山古墳の発掘調査成果について
鯖江市教育委員会(当館学芸員) 深川義之
- ・古墳時代のはじまりと越前の前期古墳
福井市文化財保護センター 田邊朋宏
- ・今北山古墳と越の古墳時代
(財)石川県埋蔵文化財センター 伊藤雅文
- ・古墳にコーフンできますか？

～カジュアルに楽しむ古墳時代～

古墳にコーフン協会理事長 伊藤 壮

【パネルディスカッション】

- ・今北山古墳の築造背景に迫る
- ・古墳を活かしたまちづくりに向けて
進行 花園大学教授 高橋克壽



③講演会・講座・展示解説・イベントなど

その他、歴史系では企画展関連の講演会や講座、歴史シンポジウム、常設展示の団体解説などを実施した。また、外部からの講座開催依頼や指定文化財等の現地での解説、現在調査中の今北山古墳群での現地解説など、館外での教育普及活動も多数実施している。

美術系では、郷土出身洋画家西山松生氏を講師に迎え、小学校での制作講座や一般向け制作講座を実施した。

特に、当館常設展示の見学や重要文化財旧瓜生家住宅での現地解説など、市内小学校の団体見学が増加していることと、学校に招かれての講座実施も増加していることから、教育現場において当館が有効に活用されている

ことを示すものである。

イベントとしては、企画展「ちびまる子ちゃん展」の関連企画としてアニメーション作品の屋外上映会（ナイトシアター）を開催したほか、郷土の素晴らしさを学ぶことにより愛着と誇りの醸成につなげる「ふるさとさばえ検定」および「キッズ検定」を実施した。各事業一覧については別表のとおりである。

区分	実施日	会場	内 容 (対象)	講 師	人数
講座	H28 4.8	鯖江 警察署	鯖江の歴史－間部詮勝から秋山徳蔵－	前田	32
解説	5.1	現地	弁財天山高地性環濠集落について	深川	40
講座	5.3	当館	大名庭園からみた嚮陽溪	藤田	60
講座	5.5	西山 公園	西山松生絵楽塾	洋画家 西山松生	24
講座	5.6	豊 小学校	西山松生アーツクルーズ	洋画家 西山松生	53
講座	5.18	立待 小学校	歩いて学ぶ近松の里めぐり	さばえ近松倶楽部 若竹健治 桑原文子	96
講座	5.26	当館	『間部家文書』から見る鯖江藩（NHK 古文書講座）	藤田	70
解説	5.31	現地	兜山古墳と 36 連隊史跡（神明小学校）	深川 藤田	576
解説	6.1	現地	重文旧瓜生家住宅解説（神明小学校）	深川	20
解説	6.1	現地	今北山古墳群の調査成果	深川	34
講演会	6.8	神明苑	謎の古代北陸道を探る	深川	40
展示解説	6.21	当館	常設展示解説（進徳幼稚園）	藤田	20
講座	6.17	鯖江 LC	制作と製作・観賞と鑑賞	丹羽	24
講演会	6.22	文化 の館	今北山古墳群の発掘調査成果	深川	120
解説	6.24	現地	重文旧瓜生家住宅解説（立待小学校）	深川	91
講演会	7.2	当館	企画展関連：幕末写真大名のはなし －西洋文明の受容と写真の見方－	東洋大学教授 岩下哲典	64
展示解説	7.8	当館	常設展示解説（中河・河和田小学校）	藤田	10
イベント	7.24	当館	わくわくアートフェスタ	（本文参照）	370
展示解説	7.27	当館	常設展示解説（神明・鳥羽小学校）	前田 藤田	76
講座	7.29	市役所	鯖江の歴史遺産と文化遺産	深川	20
解説	7.30	現地	36 連隊の歴史（神明小学校）	藤田	96

平成 28 年度 教育普及事業一覧（1） ※講師欄、姓のみは当館学芸員

区分	実施日	会場	内 容 (対象)	講 師	人数
講座	8.5	河和田 小学校	アニメーションワークショップ	井上 丹羽	17
講座	8.23	河和田 小学校	鯖江の文化と偉人 (河和田小学校)	藤田	87
イベント	8 月 下旬	市内 小学校	ふるさとさばえキッズ検定	—	211
展示解説	9.4	当館	常設展示解説 (村上市)	藤田	20
イベント	9.10	当館	ナイトシアター (アニメ作品上映会)	—	67
講座	9.15	片上 公民館	古墳クッキーをつくろう! (放課後クッキング教室)	深川	20
講座	10.1	当館	企画展関連: 受け継がれる祈り	藤田	45
シンポ ジウム	10.2	当館	今北山古墳の謎に迫る	(本文参照)	120
講座	10.8	当館	企画展関連: 白山信仰	前田	23
講演会	10.15	当館	企画展関連: 信仰の山 白山と立山をつなぐ道とこころ	富山県立山博物館 主任学芸員 加藤基樹	83
講演会	10.16	当館	近松が取り上げた政治と災害 (1)	明治大学名誉教授 原 道生	35
講座	10.22	当館	企画展関連: 地獄と極楽の思想	藤田	18
講座	10.29	当館	企画展関連: 「真宗王国」越前	前田	20
解説	10.23	現地	重文旧瓜生家住宅解説	前田	96
講演会	10.30	当館	近松が取り上げた政治と災害 (2)	明治大学名誉教授 原 道生	35
展示	11.4	当館	常設展示解説 (東陽中学校)	藤田	7
展示解説	11.8	当館	常設展示解説 (惜陰小学校)	藤田	32
展示解説	11.16	当館	常設展示解説 (稲城市)	藤田	9
講演会	11.22	立待 公民館	近松門左衛門生誕地考	武生公会堂記念館 館長 三好修一郎	20
解説	11.27	現地	今北山古墳群発掘成果説明会	深川	35
講座	12.2	当館	鯖江の文化と歴史	藤田	30
講座	H29 2.2	鯖江 公民館	鯖江藩と間部家の歴史	藤田	20
解説	2.8	神明 小学校	重文旧瓜生家住宅と神明地区の歴史 (神明小学校)	前田 藤田	89
講座	2.14	当館	近年指定の文化財	前田	19
講座	2.16	鯖江 公民館	鯖江地区の構成と地名の変遷	前田	18
講座	3.2	鯖江 公民館	鯖江繊維産業勃興の基礎	前田	18
イベント	3.5	当館	ふるさとさばえ検定	—	50

平成 28 年度 教育普及事業一覧 (2) ※講師欄、姓のみは当館学芸員

創造空間（貸ギャラリー）利用報告

展示名	期間	人数
JNP 第 15 回日本風景写真協会福井支部写真展「自然と語る」	4. 6～4. 10	465
「県内の主な滝」特集写真展	4. 8～4. 10	452
山本大廣 ささやかに、クロニカル 1961-2015	4. 14～4. 17	236
前沢弘子となでしこ会押し花作品展	4. 15～4. 17	351
廣瀬嘉信個展「感動の思い出」	4. 20～4. 24	225
塚本寛子日本画展－花画集・夢を紡いで－	4. 29～5. 8	774
初夏の洋らん展 in 鯖江	5. 5～5. 7	990
チョークアートアルコバレーノ教室展 手描きの動物園	5. 11～5. 18	715
柳川由美子教室展	5. 12～5. 15	467
itogaku. 展 私たちのお気に入り 縫い物と編みもの	5. 18～5. 22	628
「陶と籐」二人展	5. 20～5. 29	1148
fabric of INDIA ～インドの布と暮らしと歴史～	5. 25～5. 29	290
第 4 回鯖江市写真連盟作品展	6. 1～6. 5	310
第 22 回歩彩会 日本画展	6. 8～6. 12	345
第 9 回現代童画会福井地区展	6. 19～6. 26	970
第 19 回フォト SunSun 写真展	6. 28～7. 3	428
第 39 回二科会写真部福井支部展	7. 5～7. 10	377
第 5 回艸萌展	7. 13～7. 17	547
第 8 回吉川絵画クラブ作品展	9. 23～9. 25	262
第 10 回鯖江市高年大学写真クラブ写真展	9. 28～10. 2	315
第 1 回絵画研究会洋画展	9. 27～10. 6	437
竹の花器とドライフラワーの数々	10. 8～10. 16	623
絵画グループ「樹」「写画瑠」秋季合同作品展	10. 18～10. 23	493
第 33 回福井市現代美術展	10. 23～10. 30	301
PlayPray' 16「時を留めて」山本道則写真展	10. 29～11. 6	322
第 20 回「フォトあかり」写真展	11. 5～11. 13	380
パッチワーク展と北欧の生地展	12. 2～12. 4	1214
第 1 回「フォト悠遊」写真展	12. 7～12. 11	505
クリスマスチョークアート展	12. 7～12. 11	607
第 4 回丹生高校写真部写真展&写真部友情展	12. 16～12. 18	230
2017 えとの現代書〔トリ〕展〔トリの目〕・・・と、なる。	12. 25～1. 9	359
福井県立丹南高等学校平成 28 年度卒業制作展	2. 2～2. 5	336
第 81 回かきぞめ競書大会	2. 17～2. 19	432
イスラエルからのメッセージ～かみ～	2. 21～2. 26	427
第 16 回梶田屋陶芸教室作品展 私の器Ⅶ	3. 7～3. 12	—
葵の想い展Ⅲ	3. 14～3. 20	—
平池雅信・光子の写真展	3. 17～3. 20	—
花と器の共演展	3. 25～3. 26	—

※本表は 2 月 28 日現在の集計